

研究報告

シラバスから見た成人看護学実習の内容に関する報告

茂木 英美子 川久保 和子 渡邊 佳奈 村上 千秋 佐藤 栄子 青山 みどり

足利大学 看護学部

要旨

【目的】 国内の看護系大学におけるシラバスから成人看護学実習の内容を明らかにすることである。

【方法】 日本看護系大学協議会会員校のホームページに掲載されているシラバスから成人看護学実習と表記されている実習を中心に、実習内容や場所を抽出し単純集計を行った。

【結果】 162校を分析対象とした。92.6%の大学が実習を主に急性期と慢性期の病期で分け、実習内容は看護過程の展開が中心であった。実習で看護管理を学ぶ大学や、高機能シミュレータを用いた学内演習を取り入れる大学もあった。一般病棟と学内以外の実習場所は、急性期では救命センター、手術室、集中治療室等、病態に応じた侵襲性の高い治療が行われる場であり、慢性期では、外来化学療法センター、透析室、がんサロン等、長期的な療養の場と患者同士が交流を持つ場であった。総合保健機関で実習する大学もあった。

【結論】 急性期と慢性期の病期区分が主流であった。成人期の対象者が治療や療養する場も多岐にわたっており、それに応じて実習の場所も広がっている。

キーワード：成人看護学実習，シラバス，急性期，慢性期，実習場所

1. 緒言

成人とは、いわゆる「大人」のことであり、成人看護学ではその対象である大人について、社会において生活を営み人生を歩んでいる生活者として理解することが求められている¹⁾。発達段階では概ね青年後期から壮年期に該当する人々を対象とする。わが国では少子高齢という人口構造が社会的に問題となっているが、それに加えて医療技術の進歩や、医療や介護を必要とする人々のQOL向上を目指す動きが高まっており、在院日数の短縮化、退院支援の充実、病院から地域への療養の場のシフト等、医療や介護に関する体制が地域包括ケアに移行してきている。日本看護協会が示した「看護の将来ビジョン」でも、2025年問題に向けて、看護の対象となる人々の生活の質の維持・向上が強調され、疾病や障害の治癒・回復を目的とする「医療モデル」から疾病や障害があっても地域でその人らしく暮らすことを目指す「生活モデル」へのシフトチェンジが提言されている²⁾。また、成人期の対象の特徴の一つとして、仕事をもち、主体的に生活を営むことが挙げられる。そのため成人看護学が対象としている人々を理解する上で、仕事と疾病や障害の治療および療養の両立という視点は欠かせない。平成26年の年齢階級別受療率を見ると、40～44歳では人口10万人に対して入院患者は約300人、外来患者は約3,000人であり、その他の年齢階級でも成人期においては外来患者数が入院患者の8倍から10倍の数を占めている³⁾。また、国民2人に1人が罹患すると言われているがんについては、治療技術の進歩により生存率は上昇しており、以前は治療困難な病であったが、現在は慢性疾患に位置づけられている⁴⁾。健康問題を有しながらも仕事が継続できるよう、平成28年にはがんや脳卒中、心疾患などの治療が必要な疾病を抱える労働者への支援として「事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン」が策定され、治療と仕事の両立を図る社会環境の整備が進んでいる⁴⁾。

このように成人を取り巻く環境が変化する中、看護基礎教育においても学生がより成人期の対象の特徴を理解し、看護実践能力を高めるため

教育方法を検討することが必要である。通院加療中の対象を理解するための外来実習では学生の学びを纏めた報告は複数ある^{5～7)}。これらは見学実習や患者へのインタビューを通しての対象理解が中心であった。一方で、外来実習でも患者を受け持つ指導體制構築に関する報告もされている^{8～10)}。看護教育機関では現状に合わせて様々な実習内容が展開されていると考えられる。成人期にある対象を取り巻く現状に対して現在どのような実習が展開されているのか、今回、国内の看護系大学における成人看護学実習の内容や場所を調査し、今後の実習指導の参考資料にしたいと考えた。

2. 研究目的

本研究は、国内の看護系大学におけるシラバスから成人看護学実習の内容を明らかにすることを目的とした。

3. 方法

日本看護系大学協議会会員校の各大学のホームページに掲載されているシラバスから成人看護学実習と表記されている講義と、講義名に成人の表記がなくとも成人を対象としている実習と読み取れた講義について、その内容を読み、週数と実習の内容および場所を抽出して単純集計を行った。実習の内容は、実習方法が十分に読み取れた講義のみを対象とした。

4. 研究期間

各大学のシラバスは2019年2月1日～4月30日に閲覧した。

5. 倫理的配慮

足利大学の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号第50号）。本研究は各看護系大学のホームページに掲載されている内容を取り扱うため、シラバスの内容を熟読して正確な引用に努めた。また、実習の内容や実習が展開されている場所を抽出する際には、記載内容の意味が損なわれないように注意した。

6. 結果

1) 対象の大学

2019年2月の時点で、日本看護系大学協議会会員校である277校中、成人看護学実習の内容が把握できた大学は162校であった。162校の大学区分を表1に示した。国立大学30校(18.5%)、公立大学35校(21.6%)、私立大学97校(59.9%)であった。

2) 成人看護学実習の内容の概要

シラバスから把握できた成人看護学実習の内容の概要を表2に示した。講義週数は6週が129校、5週が11校、4週が17校、3週が5校であった。主な科目構成は、対象者の病期を基準とする急性期実習と慢性期実習による構成が最も多く、6週の大学で71.6%、5週の大学で4.3%、4週の大学で10.5%を占めた。急性期実習、慢性期実習に加えて終末期実習を一講義として科目構成している大学は6週の大学で1.9%であり、5週以下の大学では見られなかった。急性期実習、慢性期実習に加えて継続看護実習を一講義として科目構成している大学は6週の大学で1.9%、5週の大学で2.5%であった。終末期実習や継続看護実習を一講義として科目構成している大学もあったが、これらの実習は多くの大学では慢性期実習の内容に含まれていた。つまり、ほとんどの大学において成人看護学実習の構成は対象者の病期を基準とする急性期実習と慢性期実習で構成されていた。

臨地での主な実習内容は、一般病棟に入院している急性期または慢性期にある対象者を受け持ち、看護過程を展開していく内容であった。その中で、ほとんどの大学で臨床指導者を交えたカンファレンスを定期的に行いグループ単位での学修も深めていた。一般病棟・学内以外の実習

場所では、急性期実習では救命センター、ER、外来診療科、手術室、集中治療室、HCU、CCU等の診療や治療の場で、看護師のシャドウイングや見学実習、体験実習を行っていた。慢性期実習では、緩和ケア病棟、透析室、化学療法センター、放射線治療部、リハビリテーション部、外来診療科、地域連携室等で看護師のシャドウイングや見学実習、体験実習を行っていた。また、がんサロンや患者会を見学する大学もあった(表3)。いずれも患者が医療機関を受診してから退院し、退院後も利用する様々な部署で、対象者の理解を深めたり、それぞれの部署における看護師の役割と機能を学んだり、チーム医療について理解を深めたりすることを目的としていた。外来実習では、見学だけではなく対象者への看護実践を行う大学もあった。

多くの大学での成人看護学実習が対象者の病期を基準として急性期実習と慢性期実習に大別された枠組みである一方で、やや異なる実習展開もあり、表2の「その他」の項目にまとめた。それらの成人看護学実習の構成は、講義週数が6週の大学では、その他①看護過程を展開する能力やアセスメント力を養うことに重点をおいた実習の後、実践力を養うことに焦点をあてた実習の構成、その他②外来受診者の対象理解に重点をおいた実習と、健康問題を有して入院加療中の対象を受け持って看護過程の展開を行う実習の構成、その他③医療機関の受診時から退院までに関わる複数の部署の見学実習、一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開する実習、複数の対象への看護実践や看護管理を学ぶ実習での構成、であった。また、講義週数が3週の大学では、その他④健診機関での健康診断および外来受診者を対象とした実習と、入院加療中の対象を受け持って看護過程の展開を行う実習の構成であった。

学内実習の内容を表4にまとめた。学内実習では、オリエンテーション、事前学習、看護技術演習、個人またはグループによる実習内容の振り返り、教員との個別面談による実習課題の達成状況の確認、受け持ち患者のサマリー作成、学びのまとめ、事例発表会等が行われていた。

表1 対象の大学 n=162

大学区分	校数	%
国立	30	18.5
公立	35	21.6
私立	97	59.9
	162	100.0

表2 成人看護学実習の内容の概要(臨地)

n=162

実習期間	主な科目構成	臨地での主な実習内容	校数	%
6週	急性期実習と慢性期実習の構成 (※単一の科目構成の大学もあったが、いずれも内容は急性期と慢性期に分かれていた)	急性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・救急救命センター, ER, 外来診療科, 入院支援部門, 手術室, 集中治療室, HCU, CCU, 血管造影室, IVR室, リハビリテーション部, 看護専門外来(スキンケア外来 乳腺看護専門外来)でのシャドウイングや見学実習, 体験実習 ・専門看護師や認定看護師に同行し役割を学ぶ 慢性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・緩和ケア病棟, 透析室, 化学療法センター, 放射線治療部, リハビリテーション部, 看護専門外来(糖尿病療養相談室), 外来診療科, 地域連携室でのシャドウイング, 見学実習, 患者や家族へのインタビュー ・専門看護師や認定看護師に同行し役割を学ぶ	116	71.6
	急性期実習, 慢性期実習, 終末期実習の構成	急性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・手術室, 集中治療室, HCU, 救急外来, 透析室, 心臓カテーテル室での見学実習 慢性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス 終末期実習 ・患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・緩和ケア病棟や外来化学療法室の見学実習 ・患者会の実際を学ぶ見学実習	3	1.9
6週	急性期実習, 慢性期実習, 継続看護実習の構成	急性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・救命救急センター, 手術室, 集中治療室での見学実習 慢性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス 継続看護実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・外来, 地域医療連携室での見学実習	3	1.9
	その他	①看護過程を展開する能力やアセスメント力を養うことに重点をおいた実習の後, 実践力を養うことに焦点をあてた実習の構成 ②外来受診者の対象理解に重点をおいた実習, 健康問題を有して入院加療中の対象を受け持って看護過程の展開を行う実習の構成 ③医療機関の受診時から退院までに関わる複数の部署の見学実習, 一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開する実習, 複数の対象への看護実践や看護管理を学ぶ実習での構成	3 3 1	4.3
	急性期実習と慢性期実習の構成	急性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・救急外来, 手術室, 集中治療室, 外来で見学実習 集中治療室では可能な範囲で看護師とケア実践 慢性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・外来化学療法室, 透析室, 外来, リハビリテーション部で見学実習 ・がんサロンの訪問実習	7	4.3
5週	急性期実習, 慢性期実習, 継続看護実習の構成	急性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・手術室, 集中治療室での見学実習 慢性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・透析室での見学実習 継続看護実習 ・地域医療連携センター, がんセンター, 外来化学療法センター, 透析室, 外来診療科での見学実習 ・外来での看護師のシャドウイング, 患者へのインタビュー	4	2.5
	急性期実習と慢性期実習の構成	急性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・手術室, 集中治療室, 外来診療科, 透析室, リハビリテーション部, 内視鏡室での見学実習 慢性期実習 ・一般病棟で患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・透析室, 通院治療センター, 診療科外来での見学実習 ・外来患者を受け持ち, 看護の実際を学ぶ	17	10.5
3週	単一科目としての構成	・入院中の患者を受け持って看護過程を展開 ・カンファレンス ・手術室, 集中治療室, HCU, 透析室, リハビリテーション室	4	2.5
	その他	④健診機関での健康診断および外来受診者を対象とした実習, 入院加療中の対象を受け持って看護過程の展開を行う実習の構成	1	0.6

表3 一般病棟・学内以外の実習場所

急性期
救命センター, ER, 外来診療科, 手術室, 集中治療室, HCU, CCU, 血管造影室, IVR室, リハビリテーション部, 看護専門外来(乳腺看護専門外来 スキンケア外来), 透析室, 心臓カテーテル室, 内視鏡室
慢性期
緩和ケア病棟, 透析療法室, 化学療法センター, 放射線治療部, 外来診療科, リハビリテーション部, 地域連携室, 看護専門外来(糖尿病療養相談室), がんサロン, 患者会
その他
総合保健機関

表4 学内実習の内容

<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・事前学習(受け持ち患者の疾患・検査・治療・看護に関する学習, 成人看護学において重要な看護理論・看護モデルに関する学習) ・実習に必要な病態生理・診断・治療・看護に関する知識テスト ・看護技術演習(高機能シミュレータを用いた演習を含む) ・事例を用いた看護過程のグループワーク ・事例を用いたロールプレイ演習 ・個人またはグループによる実習内容の振り返り ・学習課題に対するフィードバック ・カンファレンス ・教員との個別面談による実習課題の達成状況の確認 ・今後の課題の明確化 ・受け持ち患者のサマリー作成 ・課題レポート作成 ・学びのまとめ ・事例発表会

7. 考察

1) 急性期, 慢性期という病期区分での実習について

多くの大学で成人看護学実習は急性期実習と慢性期実習で構成され, それぞれ一般病棟で患者を受け持ち, 看護過程を展開する実習をしている。2017年日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会(以下, 分科会)が公表した大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準において, 看護学分野では, 看護学の対象となる人間の多様な健康状態を「健康生活の保持増進と予防が課題となる状態」, 「急激な健康破綻と回復の状態」, 「慢性疾患及び慢性的な健康課題を伴う状態」, 「終末期の状態」と分けている¹¹⁾。成人看護学実習において患者を一定期間受け持ち, 看護過程を展開するためには一般病棟が妥当と考えられ, 一般病棟に入院中の患者の病期を上記の基準と照合すると急性期と慢性期に大別されることが多いのであろう。

各大学のシラバスには対象となる人の状態として, 急性期の実習では「周術期」「回復期」「クリティカルケア期」「侵襲的な治療を受ける人」「急性の健康障害が生じている人」「生命の危機的状況にある人」等と表記されており, 周術期看護を主要な位置づけにしている大学もある一方, 周術期看護だけに限定していない大学もあった。日本クリティカルケア看護学会では, 学会設立の趣意書の中で, 「ICU・CCU看護, 急性期看護, 周手術期看護, 救急看護はもとより, 在宅医療や終末期看護でのクリティカルケアや, クリティカルケア看護に関する基礎教育・継続教育・生涯教育, キャリア開発や, クリティカルケアに携わる看護職の役割拡大など, 様々な領域, 場所や場面, 状況を包含し, (中略) クリティカルケア看護の専門性構築に挑んでいきたい。」と記している¹²⁾。本研究の結果からも, シラバス上の表記から現状における看護系大学の成人看護学急性期実習の対象者は, 周術期だけでなく, クリティカルケアの概念に基づく生命の危機状態という広義で捉える場合もあることが確認できた。

一方, 成人看護学実習を急性期, 慢性期とい

う病期区分で構成していない大学もあり、表2にその他として示した。対象者を病期区分でなく、広く「成人」として捉えることは、患者を受け持つにあたって病期そのものがアセスメントの視点に必要なと考えられ、学生の思考過程の鍛錬にも繋がると考えられた。その他④は、健診機関での健康診断および外来受診者を対象とした実習、入院加療中の対象を受け持つ看護過程の展開を行う実習の構成であった。総合保健機関において健康診断を受ける対象の理解を目的とする実習は特徴的であった。これらの実習は、分科会の示す「健康生活の保持増進と予防が課題となる状態」¹¹⁾に適合する実習であり、今後増加していく可能性のある実習と考えられる。地域社会で生活している成人期にある対象が、健康問題のスクリーニングからはじまり、医療機関受診を経て入院加療していく、という経過に沿った実習は学生にとって対象理解がより進みやすいのではないだろうか。

2) 看護過程について

日本看護科学学会では、看護過程を「看護の知識体系と経験に基づいて、人々の健康上の問題を見極め、最適かつ個別的な看護を提供するための組織的・系統的な看護実践方法の一つであり、看護理論や看護モデルを看護実践へつなぐ方法である」としている¹³⁾。学生は学内の講義や演習で看護過程の概要を学ぶが、学生による実際の対象者への看護実践は実習でしか成し得ない。ペーパーペイシエントのように情報が与えられているわけではなく、日々変化していく患者への看護を考えていく必要がある。対象となったすべての大学で、学生が対象者を受け持ち、看護過程の展開をしていた。表2に示したその他①では、看護過程を展開する能力やアセスメント力を養うことに重点をおいた実習の後、実践力を養うことに焦点をあてた実習を展開していた。2017年に文部科学省高等教育局医学教育課が公表した看護学教育モデル・コア・カリキュラムでは、臨地実習について、「リスクマネジメントに十分配慮しつつ、実際の医療の現状に即し、看護を必要としているところ

で学生がそのニーズを捉え、看護過程を展開する能力を修得できるよう臨地における指導体制の充実が期待される。」とある¹⁴⁾。看護過程の展開は看護師にとって必要不可欠な能力であり、成人看護学実習だけでなく、看護学の実習全体においても中心的な内容である。学内実習においていずれの大学も自己の実践をレポートに纏めることを課しているが、実践と看護理論の統合を重視することを明記している大学もあった。理論に基づいた実践能力を育んでいくことが重要であり、大学はこれらが果たせるように指導体制を整えていく必要がある。

3) 看護実践能力向上を目指した実習内容

2018年に日本看護系大学協議会から発刊された「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業到達時目標」では¹⁵⁾、コアコンピテンシーとして6群25項目が示されている。そのうちの2, 3, 4群は「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」「根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」「特定の健康課題に対応する実践能力」となっており、学士課程において対象者の抱える健康課題に科学的根拠のある看護を実践していく能力を修得することが求められる。実践能力を高めるために学内での演習は欠かすことができない。大学によっては、実習内容として高機能シミュレータを用いた学内演習を行っているところもあった。近年、臨床だけでなく基礎看護教育機関においてもシミュレーション教育の重要性と必要性が増してきている¹⁶⁾。このシミュレーション教育を実習内容の一つとして組み込むことで、アセスメント能力の向上や看護実践能力の習得にも繋がっていくことが考えられる。

4) 成人看護学実習の場所について

一般病棟と学内以外の成人看護学実習の場所は、急性期では救命センター、ER、外来診療科、手術室、集中治療室等であった。対象の病態に応じた侵襲性の高い治療が行われる場が主であった。慢性期実習では、緩和ケア病棟、透析室、化学療法センター、放射線治療部、看護専門外来、がんサロン等であった。これらの実習場所は、

長期的な療養の場と患者同士が交流を持てる場であり、分科会の示す「慢性疾患及び慢性的な健康課題を伴う状態」「終末期の状態」に相当するものであることから、今後増加する可能性がある。実習方法はシャドウイングや見学実習、体験実習が中心であったが、外来実習において少数ではあるが患者を受け持って看護実践をする大学もあった。また、総合保健機関での実習を行っている大学もあった。保健・医療・福祉の現状は、医療の進歩や検査・治療部署等の専門性の分化と高度化、また入院期間の短縮化、それに伴う退院・退院後の支援体制の強化が図られている。健康な状態にあった対象者に何らかの健康上の問題が特定され、治療や療養が行われる一連の流れの中で、対象者が活用する機関や部署の範囲は多岐にわたり、それに応じて成人看護学実習が展開される場所の広がりも確認できた。モデル・コア・カリキュラムでは成人期にある人々に対する看護実践の学修目標の一つとして「必要な療養やセルフケアについて、社会生活に求められる仕事と生活の観点から就労生活、家族生活との両立を支援する方法について理解できる」と示している¹⁷⁾。成人看護学実習においてこれらの専門部署での体験を通しての学びは、対象者を生活者として捉える上でも、看護の専門性の幅の広さを学ぶ意味でも重要である。

成人看護学の対象となる人々が利用する多種多様な医療の場とその場で提供される看護を学ぶ上で、一般病棟以外ではシャドウイングや見学実習、体験実習が殆どである。長瀬ら⁵⁾、柴田ら⁶⁾は外来化学療法室や透析室での見学と患者との面接という実習内容による学修成果の影響要因の一つを、学生が学習者として安定した立場を保てることにあると述べている。実習内容に応じて、学生は学習者であり且つ看護実践者としての立場にもある。看護実践者としては不安や緊張を抱えながらの実習となりやすいが、学習者としての安定した立場であればストレスが少なく学習できる。教員は学生の置かれている状況を考えながら実習目標の達成に向けた支援をしていかななくてはならない。学生が臨

場で見学および体験した内容、感じたことや気づいたこと等を、学内という学生にとって落ち着いた学習環境の中で、しっかり振り返り、臨地での看護の現象の意味づけを行っていきけるよう指導していく必要がある。

実習の内容や場所は、各大学の実習目標に順じる。厚生労働省も看護学生の実習受け入れを促進するために実習の啓発用ポスターやリーフレットを作成し国民への周知と理解を図っており¹⁸⁾、今後も看護基礎教育機関は実習施設や関係機関と連携を図り教育体制を整えていくことが重要である。

研究の限界と今後の課題

本研究は、各大学のシラバスに掲載されている内容のみの分析であり、看護系大学の成人看護学実習の概要の一部を知るに留まっている。今後も様々な報告を参考にし、より望ましい実習について検討していくことが必要である。

引用文献

- 1) 小松浩子. 系統看護学講座専門分野Ⅱ成人看護学総論 第15版: 医学書院; 2019.4.
- 2) 日本看護協会. 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護. 2015. <http://www.nurse.or.jp/home/about/vision/index.html> (2019年2月7日参照)
- 3) 厚生労働省. 平成29年度統計情報・白書 第2編保健衛生第2章医療 第2-59表. https://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_2_2.html (2019年2月3日参照)
- 4) 国立がん研究センターがん情報サービス. がん登録・統計年次推移. 2017. https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html (2019年2月3日参照)
- 5) 長瀬雅子, 高谷真由美, 青木きよ子, 他. 慢性的な疾患/状態を抱える成人患者を対象とした看護学実習における体験型実習の意義. 医療看研. 2011; 8 (1): 1-7.

- 6) 柴田和恵,大野和美,臺野美奈子,他.成人看護学臨地実習における外来看護体験実習での学び. 天使大紀. 2015;15(2):41-53.
- 7) 荒ひとみ, 苜米地真弓, 阿部修子. 外来機能実習における学びの内容—実習レポートからの分析—. 旭川医大研フォーラム. 2016;17:27-36.
- 8) 飯岡由紀子, 高田幸江. 病棟実習と外来実習を組み合わせた臨地実習成人看護学実習(慢性期)の構築. 聖路加看大紀. 2014;40,112-117.
- 9) 高田幸江, 高橋奈津子, 松本文奈. 病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習(慢性期)における指導体制強化に向けた取り組み. 聖路加国際大紀. 2015;1,40-45.
- 10) 松本文奈, 高橋奈津子, 高田幸江, 他. 成人看護学(慢性期実践方法)における外来看護教授法確立に向けた取り組み—臨地実習における外来実習を見据えて—. 聖路加国際大紀. 2017;3,146-151.
- 11) 田中やよひ編. 看護教員必携資料集第3版. メヂカルフレンド社;2018.301.
- 12) 一般社団法人日本クリティカルケア看護学会. 設立趣旨.
<https://www.jaccn.jp/about/index.html>
(2019年10月9日参照)
- 13) 公益社団法人日本看護科学学会. 第13・14期看護学学術用語検討委員会報告書. 2019.
https://www.jans.or.jp/modules/committee/index.php?content_id=10
(2019年9月9日参照)
- 14) 田中やよひ編. 看護教員必携資料集第3版. メヂカルフレンド社;2018. 264.
- 15) 田中やよひ編. 看護教員必携資料集第3版. メヂカルフレンド社;2018. 316.
- 16) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.2011. <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y.html>
(2019年9月9日参照)
- 17) 田中やよひ編. 看護教員必携資料集第3版. メヂカルフレンド社;2018. 284.
- 18) 厚生労働省. 看護学生実習国民向けPR

ポスター.

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000193285.html>

(2019年9月9日参照)

〔 受付日 2019年10月31日 〕
〔 受理日 2020年 1月 6日 〕

Report on contents of adult nursing practice from syllabi

Emiko Motegi, Kazuko Kawakubo, Kana Watanabe, Chiaki Murakami,
Eiko Sato, Midori Aoyama
Department of Nursing, Ashikaga University

Abstract

【Purpose】 This study aimed to clarify the contents of adult nursing practice from syllabi of domestic nursing colleges and universities.

【Methods】 With a focus on nursing practices that describe adult nursing practice from the syllabi put on the web sites of the members of the Japan Association of Nursing Programs in Universities, the practice contents and sites were extracted. Simple totaling was used.

【Results】 One hundred sixty-two colleges and universities were analyzed. About 92.6% of them classified nursing practice into acute and chronic phases. The practice content focused on the development of the nursing process. Some let students study nursing management during the nursing practice, and others adopted a high-performance simulator as an in-school nursing practice. In the acute phase, nursing practice sites other than general wards and the school premises were high invasive settings such as emergency unit, surgery room, and intensive care unit according to clinical state, whereas, in the chronic phase, nursing practice was held at long-term treatment places such as outpatient chemotherapy center, dialysis room, and cancer salon, in addition to the places where patients have an interaction with each other. Some introduced clinical training at general health organizations.

【Conclusion】 Phase classification into acute and chronic phases was mainstream. Facilities for treatment, therapy, or recuperation for adult patients are various. Accordingly, nursing practice sites are also increasing.

Key words : adult nursing practice, syllabus, acute phase, chronic phase, practice site